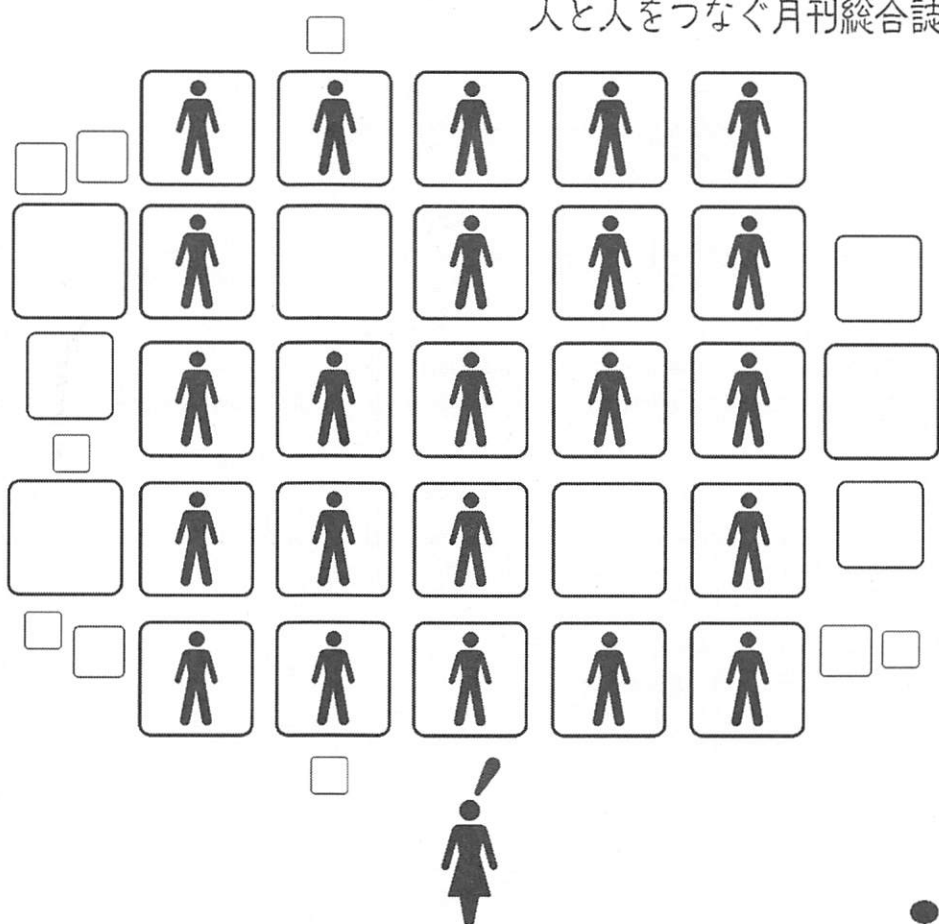


平成18年
3月号

250円

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



女性

沖縄風ドーナツ

イスティカーマ(まっすぐであること)

花の香りに気付くこのごろ

『エリン・ブロコビッチ』

入院記～ 手術前日と当日 編～

「魂が成熟した女性は、彼女が育て、残したすばらしい後継者のおかげで、その家庭は常に香炉のように湯気をあげ、心地よさを与える香りを醸し出す。この芳香が絶えず漂う気高い場所は、あらゆる定理、力を超越する、まさに天国の庭である。」 p.4



「女性ってすごいねえ。」ある日しみじみと夫がそう言いました。なんでも、好きになった男性を追って海外に行くために様々な計画をたて実行に移そうと燃えている女性に出会ったとかで、その情熱の強さに圧倒されたようです。確かにそういう話は女性に多く聞くなあと思いつつ、身近なところにいる「すごい」女性に想いが移りました。

いつも笑顔で迎え、送り出してくれる保育園の先生たち。仕事は相当ハードだろうし私生活の浮き沈みもあるだろうに、疲れた様子など微塵も見せず、明るくゆったりと構えてらっしゃいます。愛情深く子供たちに接してくれている様子には預ける側としてこれ以上の安心感はなく、母親側の疲れや悩みも素早く察知して気遣いの言葉ささかけてくれ、心の支えになってくれています。

きれい好きで料理上手、突然やってくる大勢のお客さんも意に介さず心地よくもてなしてくれる友人。そのお宅にお邪魔するとリラックスできるのは、単に部屋が整然としてお料理がおいしいからではなく、もてなす友人の精神的安定や愛情、心の細やかさが家中に満ちているせいだと思うのです。そのような家に帰宅するご主人や家族は十分にくつろぐことができ、家で余計な心配事や問題を抱え込むことはあまりないだろうなと想像できます。

そして病気で寝込んだところなど一度も見たことがない自分自身の母親。具合が悪くならないということはないでしょうから、表に出さず淡々と家事をこなしていたのでしょう。家族の生活が滞らないよう、より快適になるよう動き回っているのは父よりも母です。それは母が専業主婦であるときだけでなく外で働いている時期も同じでした。仕事等で疲れ気味の時など家の中は減茶苦茶、夫に当たって憂さ晴らしという私とは大きな違いです。

こうして身近な例でその「すごさ」を列挙してみると、置かれた状況の如何にかかわらず、愛情や精神の細やかさを周囲の人に使えること、忍耐強さなどの共通点が浮かび上がってきます。いかにも女性の特徴として述べられる月並みな表現ですが、一般的には実際に男性より優れた点であること、そういう資質を備えていながらも発揮することが難しいことなどを考慮に入れば、素直に自分の成長に役立て周囲に還元する価値の大きいものだと思います。女性の素晴らしさ、他にどんな点があるでしょうか？今月のテーマは「女性」です。



編集部より	2
女性	3
祈りのある毎日へ	5
沖縄風ドーナツ	5
イステイカーマ（まっすぐであること）	6
遠い未来についての言及	9
ご病気の方々へのメッセージ	12
花の香りに気付くこのごろ	15
『エリン・プロコピッチ』	16
母たちへの賛辞	18
マルヤム様	22
入院記～ 手術前日と当日 編～	26





A. シャーヒン (Abdulfettah Sahin)

子どもたちの教育やしつけ、家庭の秩序、安定、道徳において、人間の学び舎の最初の教師は女性である。女性からより様々な仕事を求める現在において、もう一度、力の持ち主である主が、女性に与えられたこの特別な役割を認識しなおすことが、こうした不適当な要求を防ぐものとなるだろう。

清廉で教養があり、家庭を大切にする女性がいる家は、天国の一面のようである。そこで聞かれる声、息遣いは、フリー（天国にいる女性）、グルマン（天国で奉仕する若者）の声、天国の川のせせらぎの音そのものである。

外見上の装飾に押しつぶされたような女性を見ると、人は時として、「女性の内面的な飾りである純潔さ、貞節、徳といったものにも、これ位重きを置いているのだろうか。」と考えてしまう。

女性を、天使よりもなお崇高なものとし、比類ないダイヤのような状態にするものは、女性の内面的深さ、清廉さ、そしてその尊厳である。その純潔さが問題視されるような女性は、偽造されたコインのようであり、品のない女性は嘲笑されるべき操り人形のようなものである。このような女性のもたらす空気からは、健全な家庭も、健やかな次世代も期待できない。

その内面世界と共に、徳に目覚めている女性は、彼女がいる家において、水晶のシャンデリアに似ている。彼女のあらゆる動きによって、家中に灯りがもたらされる。内面世界において暗い思考に従ってしまっている女性は、霧や煙の源であり、どこへ行ってもそこを穢す。

女性が常に手元に置き、読むべき唯一の本は、社会的教養の本であるが、今のところ、完全に書かれているものがあるとは言い難い。

自らを、我欲への執着で包みこんでいる女性を見ると、「女性の理性は狭いものだ」と語った人々に対し、私は寛容になる。このように語った人々は、現代の、広告に利用されているような状態を見て、いふべき言葉を見つけれないであろう。

古人は、「女性の手にある針は、戦士が手にする槍のようである」といったが、実際私は、この言葉には誇張はないと見なしている。

女性が、他人のための快樂の品、楽しみ、コマーシャルの材料となる時代は、決して少なくない。これらの不幸な時代はそれぞれが、女性の復活と自己の再発見のための始まりとなった。

昔は、息子を「マフドゥム」と、娘を「ケリメ」と呼んだ。この言葉は「瞳」と同じ意味をもつものである。これは、とても大切に、また欠かせないものであり、同様にこの上なく繊細な存在であるということを示しているのだ。

「服のすそが埃や泥で汚れないように。」と私たちは言う。しかし、瞳である女性が守られ、大切にされることがどれほど大切か、私たちは理解できているだろうか。

徳のある女性を飾るのが、目に見える貞節と清廉さであるように、社会的教養と夫に対する誠実さが、最も評価されるべき、驚嘆に値する点である。

よい女性は、話すことに知性を感じさせ、その精神には繊細さと品のよさ、振舞いにおいては周囲に敬意を払う。その崇高さを直感させることにより、人間によってもたらされる内面的苦痛を警告や熟考へと変える。

肉体的に成熟しているのに、心や魂の種を発達させることができないでいる女性は、ある程度は花に似ているかもしれないが、あつという間に色あせ、枯れてしまい、葉を落とし、踏み潰される存在となってしまう。永遠への道を見出せない者の結末はなんと悲しいものであろう。

女性は、傷つけられ、汚水に捨てられるべきではない、尊い鉱石である。将来の、知識や閃きや真実に目覚めた世代が、女性を瞳のように大切に扱うであろう、という希望を、私はまだ捨ててはいない。

女性たちは、私たちの国家の誇りや名誉の最も確かな礎石である。私たちの、あの長く続いた幸福な過去の時代の形成において、女性たちの果たした役割は、敵たちと戦った戦士たちに決して劣らない。

女性たちの世界の権利や自由を叫ぶ人々の多くは、女性たちの世界を物質的な快樂へと走らせ、その魂を切りつけること以外に何もなしえていない。

魂が成熟した女性は、彼女が育て、残したすばらしい後継者のおかげで、その家庭は常に香炉のように湯気をあげ、心地よさを与える香りを醸し出す。この芳香が絶えず漂う気高い場所は、あらゆる定理、力を超越する、まさに天国の庭である。

心を信仰の光で、頭を知識や社会的教養で輝かせる女性は、その家を日々新たに造っているかのようで、そこに新たなすばらしい境地を開く。未熟で、自らを見出せていない女性は、既成の家庭ですら壊し、戦場に、墓場にと姿を変えさせてしまう。

女性は、汚れた器、価値のない石のかけらではない。同様に、その居場所も、汚れた器や価値のない石ころがあるような場所ではない。女性は比類なきダイヤであり、螺鈿に飾られた宝石箱で守られるべきなのである。

女性は、その繊細さ、細やかさにおいて特別な地位を占める。その特性によって、女性は自らの天性のあり方、性分のままに振舞うことによって、家庭に、またそれによって社会に、益をもたらすことができる。

今日まで、フェミニストたちが女性について主張してきた提案は、女性を粗野にさせ、立場を落とし、変質させてきた。しかし女性は、存在の鎖の中の非常に重要な輪であり、その重要性は本来のあり方である、ということにおいて最大限となるのだ。¹

¹ この全て文章は "Pearls of Wisdom" よりの訳です。



最も力強い統治者よ
 完璧に公正なるお方よ
 誠に誠実なるお方よ
 最も明らかなるお方よ
 最も清らかなるお方よ
 最善の創造者よ
 清算に最も迅速なるお方よ
 実に傾聴なさるお方よ
 最も気前よくもてなされるお方よ
 最もよく執り成すお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。²



沖縄風ドーナツ

材料	材料	卵 2	砂糖 100g	塩 少々
小麦粉 200g		ベーキングパウダー 少々		油 少2

作り方:

- 1 ボウルに卵を割って、砂糖、塩を加えて混ぜる
- 2 1に小麦粉、ベーキングパウダーを入れて混ぜる
- 3 油を加えて混ぜる。30分休める。
- 4 手に油を付けて、生地を丸める。150℃ぐらいの温度であげる。低めの温度でゆっくり割れ目が出来たら火を強めて温度を上げる

² 偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）には、祈願（きがん）、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要で、す。本来、偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



イステイカーマ(まっすぐであること)³

イステイカーマとは、あらゆる逸脱や極端さを避けること、また宗教行為や日常生活において忠実な信者、(真実の)証人であり、(信仰において)正しい人々であった預言者たちの足跡をたどることと、真実を求める人々は解釈してきました。『本当に、「わたしたちの主は、アッラーであられる。」と言って、その後正しくしっかりと立つ者、かれらには、(次から次に)天使が下り、「恐れてはならない。また憂いてはならない。あなたがたに約束されている樂園への吉報を受け取りなさい。」(と言うのである。)(クルアーン 41:30)』これは、アッラーが主であることを認め、アッラーの単一性を断言し、信仰や行為、日常生活において預言者たちに従った者を天使たちがあの世で迎え入れるということを私たちに教えてくれています。このような非の打ち所のない人生を送ることができた人には、審判の日、人々が恐れと不安に震えているときに、素晴らしい樂園の便りがもたらされるのです。

行為は宗教的義務を果たすことによって、エゴ(内面の自我)はシャリーアの真実に従うことによって、精神はアッラーを知っていることと合致した行動をとることで、最も深い感覚や能力はシャリーアの精神に従うことで、まっすぐになります。これらのどのレベルにおいてもまっすぐであることは困難であるため、人類でもっともまっすぐな方、預言者ムハンマド(彼の上に平安と祝福あれ)は「フード章やそれに似たものは私を年取らせた」とおっしゃり、アッラーの命令を引用されました。『それであなたと、またあなたと共に悔悟した者が命じられたように、(正しい道を)堅く守れ。(11:112)』

預言者ムハンマド(彼の上に平安と祝福あれ)はまっすぐな道から逸れたことは一度もなく、行為においても言葉においても感情においても常にまっすぐであられました。彼は救済と永遠の幸福を求める教友たちをまっすぐであるように導かれ、次のようにおっしゃられました。「言え、『私はアッラーを信仰している』と。そしてまっすぐであれ。」この言葉は信仰と行為の本質のすべてを簡潔に要約しています。

もしも人々が真実の道において前進していると主張していても、まっすぐな状態になく、まっすぐに行為をしていないならば、すべての努力は無駄であり、あの世で、そのまっすぐでなく費やしてしまった時間についての責任をとらなければならないのです。望む目的地に辿り着くためには、信仰する者は始めにまっすぐであり、旅を通じてそれを維持し、アッラーの知識を与えられたことを感謝して、旅の最後にもまっすぐでなければなりません。始めにおいては逸脱の可能性に対して用心深くあり、旅の間は自己監督に十分に注意を払い、間違った考えや行いには交わず、終わりにはアッラーのお喜びと承認だ

³ この文章が“Key Concepts in the Practice of Sufism”よりの訳です。

けを求めるということが、この状態の重要な表れと言えるでしょう。

まっすぐな人々の中のひとりを知っている。

彼は導きの王国の中で最も目立っていた。

彼はアッラーがアッラーであることという光に魂を売った。

そして、人間の本性の汚れをすべて浄化されて死んだ。

しもべは不可思議なことや精神的発見、悟りなどというものではなく、まっすぐであることを探し求めるべきです。アッラーはまっすぐであることを要求されました。しかし、しもべは並外れた精神的能力を求めます。バヤズィド・アル＝ピスタミが水の上を歩き空を浮かぶ男の話を書かされたとき、彼はこう言いました。「魚やカエルも水の上を浮かび、昆虫や鳥も空を飛ぶ。もし敷物を広げて水の上に浮かんだり脚を組んで空中に浮かぶ男を見たとしても、興味を示さないようにしなさい。むしろ、その人物がまっすぐな状態か、まっすぐに行為をしているか、それらがスナ（預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）の言行）に合っているかどうかを考えなさい。」

バヤズィドがアドバイスしたのは、信仰する者はしもべとしてまっすぐで完全に謙虚であるべきであるのであって、不思議の空気の中を飛ぶ者であるべきではないということです。

まっすぐであることがアッラーへと近づくための三段の階段のうちの最後の一段です。一段目は密度であり、旅人がイスラームの理論的実践的側面を具体化しようと努力するところです。この努力を絶え間なく続けることで、現世的自我を抑制することができますようになります。二段目は定着もしくは平穏です。そこでは信仰する者は自分の内面から精神や心を汚す悪行（誇示や名声、虚栄心など、しもべであることと合致しないことすべて）を取り除き、心をアッラー以外のものすべてから清めます。三段目はまっすぐであることであり、アッラーと万物の扉が旅人に少しだけ開かれ、アッラーからの贈り物が、本人は願っても求めでもないのに、不可思議なことや祝福という形で授けられます。

まっすぐであること、つまり道の最後の部分は、アッラーへの忠誠から逸脱せずにアッラーの直接



の保護の下で生きることを意味しています。これはアッラーからの贈り物とご好意が授けられた環境なのです。花は決して色あせることはなく、丘や坂道には冬が来ることがなく、それは永遠の「春」の環境なのです。これは次の言葉で示されたものです。『もしかれらが（正しい）道を守るならば、われは必ず豊かな雨（凡ての恩恵）をかれらに恵む。（72：16）』人々がアッラーの単一性についての信仰という道においてまっすぐさを追求し、アッラーの下された法を遵守することによってアッラーとアッラーの使者との約束を果たす限り、アッラーからの贈り物と恵みは豊富に与えられることでしょう。

預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）はおっしゃいました。「しもべの心が健康でまっすぐでない限り、彼の信仰は真実かつ正当であることはできない。彼の舌が真実でない限り、彼の心は健康でまっすぐであることはできない。」また、次のようにも述べられました。「毎朝、人間の体の様々な部分は、その舌に対して警告する。『私たちのことを考えて、アッラーを畏れなさい。あなたが正しくあれば、私たちは正しくまっすぐになる。あなたが曲がっていれば、私たちもまた逸れてしまうから。』」

最後に、アサド・ムフリス・パシャによる、とても重要な警告を聞きましょう。

まっすぐであるためには、常に正しく忠実であることが必要です。

片脚を中心に固定して、「コンパスの動く方の腕（もう片方の脚）」を旅させなさい。





『遠い未来についての言及』

10. 利息の広まり

いつの日か、利息の仕組みは大きく広まり、利子を手にしないう者でさえ、その影響は免れないであろう。今日我々を最も苦しめ、そして日々恐ろしく拡大し続けているこの病について、ムハンマドは次のように言及されている。「人々にいつか次のような日が訪れるであろう。利子を手にしないう者は誰も残らず、もしいたとしてもそのちりからは免れない」⁵

このハディースは二つの側面から注意を引くものである。

一つめ、政府の全ての財源は利息のシステムの中からもたらされるもので、つまり、銀行やそれ以外の機関と連動しているのであり、人々がいかに注意深く振る舞ったとしてもこの生活を取り囲むこの伝染病と接触しないではいられない。このような状況で人は唯一その意志のために救われる。意志が彼の避難所である。

二つめ、アラビア語で「ちり」にはもう一つの意味がある。一部の人は利息を手にするだろう、手にしないう者はそのとばっちりを受けるだろう。資本家たちは利子によって資産を増やし、労働者層はそれにとまって財産を失う。この二つの層の間の容赦ない争いは社会の騒動を招く。いつか、皆を苦しめるものとなるであろう。

私の考えでは、これらは全て実現した。そして今も実現している。今日の人間はこの二つの側面のどちら共にあてはまる。今日、直接的あるいは間接的に、利息と何の接触もない貿易機関は存在しないと言ってもいいであろう。世界規模で、全ての貿易、商取引がそれを含んだ歯車に、ふつうの買い物のように、承認されているのである。

預言者は、今日の人々が苦しめられている利息がもたらす危機についてずっと以前から共同体に注意を促し、警告されていた。しかし、見ていただきたい。イスラーム社会はどこも、喉元まで利息の沼にはまり、あがいているのである。この汚水の中から抜け出す熱意もない。しかし、イスラームは、利息に対しての戦いを宣言している教えなのである。⁶

ムスリムたちが、聖クルアーンにおけるこのテーマについての恐ろしい言及について、せめて一部だけでも理解していたら今日、債務国として世界で最もだらしのない国の中に数えられることはなかったであろうに！

⁵ この文章は“Prophet Muhammad: Aspects of His Life-1”よりの訳です。

⁶ Ibn Maja, Tijarah 58; Ibn Hanbal, Musnad 2/494; Nasa'i, Buyu' 2

『聖クルアーン』雄牛章 2/278, 279

1 1. 信者であることが隠される時

今日のあり方を示している別のハディースがある。「人々の上に、次のような時代が訪れるだろう。すなわち、信者は自分が信者であることを他の人から隠すだろう。ちょうど今日、偽信者たちがそれを隠しているように」⁷

当時、偽信者たちはいかに振る舞っていたか？ 自分のことを気づかせないためにどんな手段をとっていたらうか？ それと全く同じように、信者たちが振る舞うようになるだろう。信仰行為を隠れて行い、自分の立場を守ろうとするようになるだろう。そうしなければ彼の立場はよくなる。職場や公的機関のいくつかは信者に対して完全にその扉を閉ざす。彼らは社会の中でも蔑視される存在となるであろう。

他のハディースでも、このことが強調されている。「騒動が起こる。その時、人は礼拝したと言って非難される。ちょうど、不義を働いた女が今日非難されるように」。もちろん、ここでの不義を働いた女というのは、当時の見解を元にしての比喩である。現在では一つの職業とみなされるほどであるが。

そう、礼拝のために人が軽蔑され、恥ずべきことをやったかのように罪に問われ、悪い権力の支配に苦しんでうなり声を上げる時代が来るであろう。そして信者は、この不運を自らを隠すことでくぐり抜けようとするであろう。

1 2. タラカンの石油

預言者は述べておられる。「吉報をタラカンに。そこに、アッラーの、金銀以外の宝がある」⁸

アラビア語の「ワイフ」(吉報)は、苦い微笑のような知らせについて用いられる。聖アンマルが殉教することを知らされた時にも、預言者ムハンマドは同じ表現が使われた。「タラカン」は、カズインの、石油油田の多い地方の名前である。将来的に、その地で他の鉱物が発見されるかもしれない。ウランウムやダイヤの鉱床もあり得る。そしてそうなったとしても結果として同じである。預言者は、金、銀ではない宝と言っておられるからである。そして、今日これは実現している。つまり、タラカンに出た石油でさえも、預言者ムハンマドを評価し、その正当性を主張しているのである。

1 3. 聖クルアーン以外の啓典へ従うこと

イスラーム世界は、自分たち以前のウンマ、つまりキリスト教徒やユダヤ教徒に、少しずつ従いだし、真似をするようになる。さらには、彼らのうち誰かがその頭をどこかに突っ込めばムスリムたちもそれに従って同じようにそこに頭を突っ込むだろう。預言者ムハンマドはこの点について、次のような言葉で語られている。「あなた方は、あなた方以前の者たちに従い、真似をするだろう。少しずつ、彼らの後をついて行くだろう。さらには、彼らが頭をどこかに突っ込めば、あなた方も同じことをするだろう」⁹

⁷ Hindi, Kanz al-'Ummal 11/176

⁸ Bukhari, Salah 63; Muslim, Fitan 70,72,73; Ibn Hanbal, Musnad 2/161, 164

⁹ Hindi, Kanz al-'Ummal, Muslim 'Ilm 6; Bukhari, al-'Anbiya' 50

教友が、あなたたち以前の者というのはキリスト教徒やユダヤ教徒のことを指すのかと尋ね、預言者ムハンマドはそれ以外に誰であり得ようかという意味の答えをされた。

今日、我々および全てのイスラーム世界の状態は明らかである。我々のほとんど全てが個性を失い、アイデンティティーの喪失に苦しんでいる。我々の状態は、ハディースの表現を用いるなら、二つの群れの間で行ったりきたりしている羊と何も変わらない。かつて他の国家を破壊し、食い尽くしたよくない事態が、今だこのように我々に絡み付いているのである。我々も、真似を続けることによって、死の口を新しいもの、文明の進化だと思いついでいるのである。今我々が西洋を模倣しているのと同じくらい、いつの時代のものであれ何らかの国家が、彼らを模倣したことはないはずである。西洋世界に現れる新しいもの全てを我々もすぐに受け入れている。この受け入れという点では、いくつかの西洋諸国を追い抜いてしまっているほどである。しかし、預言者ムハンマドは、最も些細なことでさえ、彼らに対立されていたのであった。¹⁰

今回のテーマはそのことではないため、このことについてはここでは言及しないで置こう。

ここで、我々が強調したいのは、全てのこれらのことを預言者ムハンマドが何世紀も前に知らせておられたということと、時期が来て、これらが実現したということである。全ての出来事は、預言者ムハンマドによって知らせとして語られる。そして定められた時が来るとそれらは実現し、預言者ムハンマドの正しさを証明するのである。



¹⁰ See Abu Dawud, Salah 88; Ibn Hanbal, Musnad 5/264, 265

ご病気の方々へのメッセージ

第18の治療薬

ああ、感謝することを放棄して不満を述べている患い人よ。不満をいうには、正当性がなくてはならない。あなたの権利が一つでも失われたわけではないのに、あなたは不満を言っているのだ。あなたに対して感謝させる権利を持っているものがたくさん存在するのに、あなたはその感謝を行なわなかった。アッラーに対する正当性を持たないまま、根拠もない形で権利を求めているかのように、不満を述べている。あなたは、健康という点で自分よりも上の段階にいる人たちを見て不満を言うべきではない。おそらくは、自分よりも悪い段階にある病人達を見て、感謝する義務を負っているのだ。あなたの手が折れてしまったのなら、手が切断された人のことを思いなさい。片目が失われたのなら、両目を失った人のことを思いなさい。アッラーに感謝しなさい。

そう、恵みという点において、自分よりも上の段階にある人を見て不満を言う権利など、誰にもないのである。そして、災いに遭遇した時皆にとって正当な権利とは、災いという点でさらに上の段階にいる人のことを考えることであり、そして感謝することである。

このことに関する説話は、別のところでも示したことがあるが、要約は次のとおりである。

ある人が、一人の不運な人物をミナーレ（モスクの尖塔）に上がらせていると考えて見なさい。ミナーレの階段それぞれにおいて、それぞれ別の恵み、贈り物を与える。ミナーレのてっぺんでは最も素晴らしい贈り物を与える。このさまざまな贈り物に対して、感謝すること、恩を感じる必要があるにも関わらず、この人物が、階段ごとに与えられた全ての贈り物のことを忘れ去って、あるいはないものと見なし、感謝をせず、上を見ながら「このミナーレがもっと高かったらよかったのに。もっと上まで上がれたらよかったのに。どうしてこのミナーレは他のミナーレみたいに高くないのだろう」と不満を言い始めたとしたら、それはいかに恩知らずで不当な行為であろうか。人は無から存在を得て、石にもならず、木にもならず、動物にもならず、人間になれた。そしてムスリムとして、長い間健康にも恵まれ、大きな恵みを得てきた。にも関わらず、恵みに適当でないと、あるいは誤った判断のせいで、あるいは何かを悪用したせいで失ってしまった、手が届かなかったとして不平を言うこと、忍耐できなくなること「私が何をしたというのだ。こんな災難に襲われた」と、神の「全てを与えられるお方」という特性に対して非難したりするようなことは、肉体的な病よりもなお困難な、魂の病である。折れてしまった手で向かって

行くように、その不満によって病をさらに悪化させることになる。

理性のある人なら、災難に遭うと「本当に私たちはアッラーのもの。彼の御許に私たちは帰ります」と言う者。(雌牛章156節)

に秘められた意味のように、神にお任せし、耐えるべきである。そうして、その病の任務を終了させ、去らせるのである。

第19の治療薬

偉大さと無限の美を備えられたお方アッラーの全ての美名は「何ものも必要とされないお方」という美名の表現で示されているように、素晴らしいものである。存在する全てのものの中で、このお方の最も優美で素晴らしく、意味深い鏡は、人生である。美しいものを映す鏡は美しい。美しいものの美しさを示す鏡は美しさを増す。鏡の前に何であれ美しいものがあれば鏡も美しくなるように、人生の上で何があらうと、真実の点においてそれは美しい。なぜならそれはアッラーの美名の素晴らしいはたらきを示しているからである。

人生が常に健康のうちに何事もなく過ぎれば、そのはたらきは一つの鏡に過ぎなくなる。それはある形で消滅や無を思い起こさせ、苦しみを与え得る。人生の価値が目減りし、生の楽しみを苦しみによって失う。早く時間が過ぎるようにと道楽や快樂にふけるようになる。それが刑期であるかのように、貴重な生の時間を敵視し、時間をつぶして過ぎ去らせようとする。

しかし、さまざまな状況変化や動きの中でいろいろな状態を経ていく人生は、その価値をひそやかに示し、人生の重要さと楽しさを知らせるものとなる。苦しみや災いの中にあっても尚、生の時間が終わることを望まない。時間が過ぎない、と不平を言うこともない。

そう、裕福で、やらなければいけないこともなく、安楽いすに座って、全てが揃っているような人に尋ねてみなさい。「今どのような状態ですか」と。「いやあ、時間がぜんぜん過ぎないよ。おいで、一緒に遊ぼう。時間つぶしのために何か楽しいものを見つけよう」というよう、悲痛な返事を得ることになるだろう。あるいは、果てのない欲望からもたらされる「これがない、あれがない、これもやっていたらよかった」というような不平を聞くことになるだろう。

困難な状態の中にあり、やらなければいけないことを多く抱えている貧しい人にも聞いてみなさい。彼が理性を持っているなら、こう言うであろう。「神に感謝を。元気で働いているよ。時間がこんなにも早く過ぎなければいいが。仕事を終わらせられない。時間が過ぎるのは早いよ、止まらない。いろいろな苦労はあるけどそれも過ぎていってしまうものだ。何もかも、あっという間に過ぎていってしまう」と。生の時間がどれほど重要であるか、過ぎ去ってしまうことへの悲しみと共に語る。つまり、困難さや働いて

いることによって、人生の楽しみや生の時間の価値を理解しているのである。苦勞のなさ、病のなさは人生を辛いものに変え、だからこそ早く過ぎてしまえと願うのだ。

ああ、病気の兄弟よ、知りなさい。災い、災難、さらには罪の元、本髄とは無である。無は災難であり、闇である。変化のない安楽な状態、動きのなさ、停滞といった状態は無に近いものであり、だからこそ無における闇をほのめかし、苦しみを与えるのである。動きや状態変化は存在であり、無ではなく存在を示すものである。存在とは偽りのない善であり、光である。

だから、あなたの病気は、あなたの貴重な生を純粋なものとし、力を与え、より良いものとし、体の他の各器官がその病んでいる器官のために協力し合うこと、そして全てを英知でもって創造されたお方のそれぞれの美名の働きを示すこと、といった多くの任務のためにあなたの体に客として派遣されたのだ。インシャッター（神がお望みならば）、早く任務を果たして去るように。そして健康に告げる。「さあ来なさい、私の代わりにここにずっといなさい。あなたの任務を果たしなさい。ここはあなたの住処だ。ここで楽にしなさい」



まだまだ寒い日が続き今年には特に春が待ち遠しく感じます。地面のぬれた道を、顔に冷たい空気を感じながら家までの道のりを歩いていると、ほのかないい香りがしました。私は花が好きなので、その香りのもとをすぐに探したくなりました。花の香りということは確かなのですが、その香りのもとの花を探すまでに少し時間がかかりました。よく探してみると、私の背丈よりも高いところに黄色い花が咲いていました。まわりはすべて葉の落ちた枝しか見えない木が並んでいましたが、その木だけには黄色い花がぼつぼつとくっついているようでした。あんなに固い枝からこんなに花びらのやわらかい、いい香りのする花がどうして咲くのかなと、しばらく見ていました。ど根性大根がテレビでは話題になりましたが、アスファルトを砕いて植物が育つ様子には驚いてしまいます。私の実家の前はアスファルトの道に舗装されていますが、そのアスファルトは春にもなると、あちこちでひび割れ、その下から小さい芽が顔を出します。やわらかい芽が固い地面やアスファルトを押し上げて成長する姿はとても力強いです。

春は新しい芽吹きが始まる季節と共に、新しい出会いや別れ、そして次へのステップへと移る時期でもあります。幼稚園から大学と、卒業式、そして入学式があります。新しい環境に移ることで、自分が成長する時期でもあります。そんな節目の時期に、改めて自分を見つめる機会をもつことも大切な事だと思えます。私はこんな節目の時期にとっても新鮮な気持ちで、新しいスタート地点に立ったような気持ちになります。次の春が来る頃には新しい人間関係が築かれていることに気がきます。達成感を得たような感じや、自分が成長した気持ち、また一年、年を重ねたという気持ち、そんないろいろな気持ちがこみ上げてきます。私にとっては年明けよりも、様々な変化を与える春のこの時期に年の節目を感じる人が多いです。

ある年齢に達した頃から、目先の何年かを考えて生活することから、人生をまっとうするまでの残りの年のことを考えながら生活するようになりました。また当然「ある」と思っていた命もとても尊くそして限りのあることに気がきました。「よいことは早く進めなさい」という言葉がありますが、その意味することも実感してきました。それもその通り、限りのある人生でよいと分かっていることを待つ必要はまったくありません。手助けをする時もすぐに行動に移さないとその機会を逃してしまいます。また助けたいという気持ちが高まった時に行動に移さないと、その気持ちが薄れたり、弱くなったり、あるいは自分のことにだけ目がいくようになり、助けたいという気持ちも忘れてしまうことにもなります。残りの人生について考えるようになってからは、自分をよく見つめる機会が増えました。私の人生これでいいかな？もっと出来ることはないかな？今しか出来ないことはないかな？間違いは犯していないかな？何か大切なものを忘れてはいないかな？知らなければならないことはないかな？気付いていないことはないかな？自分が流されていないかな？十分に感謝することが出来ているかな？とそんなことを考えながら毎日を送っています。



『エリン・ Brockovich』 Erin Brockovich

今月号の「やすらぎ」のテーマは「女性」です。このテーマを聞いた時に私の頭に真っ先に思い浮かんだ映画が、タイトルにあげた『エリン・ Brockovich』でした。この映画は、訴訟大国アメリカで史上最高額の和解金を勝ち取った実在の女性の活躍を描いたドラマです。

カリフォルニア州の小さな町に暮らすエリン(ジュリア・ロバーツ)は元ミス・ウィチタ(カンザス州の都市)の美貌ながら、無学で離婚歴2回、3人の子持ちで無職。職探しの面接の帰りに追突事故に巻き込まれた彼女は、引退を控えた弁護士エド(アルバート・フィニー)に裁判の弁護を依頼するも、和解金を取り損ねてしまう。職もなく貯金も尽きかけた彼女はエドの法律事務所へ押しかけ、強引に彼のアシスタントとして働き始めることに。書類整理中に彼女が見つけた不動産売却の書類には、なぜか血液検査の結果が添付されていた。孤軍奮闘して調査した結果、彼女は大企業の工場が有害物質を垂れ流しにしている事実を突き止める。病に苦しむ住民たちを目の当たりにしたエリンは、気乗りしない彼らを説得し、訴訟に持ち込もうとする。及び腰だったエドも本格的に関わり始めてきてくれたうえに、彼女の隣に住むジョージ(アロン・エッカート)が3人の子供の面倒を見てくれ、主夫として私生活をサポート。地道な活動が住民たちの共感呼び、大企業と交渉の場を持つまでになっていった…。

エリンは、ジュリア・ロバーツが演じている事からもわかるように、美人だが気が強く挑発的であり、スタイルは良いがファッションも強烈で品が無い。しかしバイタリティーにあふれ、何事にも真剣に体当たりで挑んでいくあたりがスゴイ女性です。汚染の問題に関しても、自分にも(シングルマザーではあるけれども)家族が居る事、守るべきものがあることから、自分のことのように憤り、一生懸命調査し、へこたれません。もちろん、ジョージなど周囲の男性などの手伝いや励ましが無ければこの訴訟に勝つことは出来なかったわけで、エリンだけの力ではないけれども、地道に人の話を聞き、訴訟へと人々をまとめていく能力は彼女にしかないもの、彼女にしか出来なかった事なんじゃないだろうかと思います。また、今まで破天荒な生き方をしてきたからこそ、「前例が無い」事にも気負わずチャレンジしていけるのかもしれない。子供を抱えて途方にくれる事はあっても、どうにかなる、いや、どうにかしてやるという思いがちょっとしたところからであっても道を拓いていくのかなと、改めて女性の強さを見た気がします。

女性には、女性にしか出来ないことや女性にしか持てない視点があると思います。エリンが病に苦しむ住民たちと徐々に打ち解けていくのを見ると、女性だから話せる事、女性だからできる事だったんだなあ、と納得する事も多いです。反面、母親なのに子供になかなかかまっていられなくなってしまうという事態にもなりますが、反抗していた息子も彼女のやっている事がどういう事なのか、何のために自分達へ割かれるはずの時間を使っているのかを理解すると、応援してくれるようになっていきます。もうこ

こまでくると仕事の域を超えているとは思いますが、自分の信念に因って人のために何かをし、それでお金を得る事ができたら、これほど幸せな仕事もないでしょう。

ところで、女性だって外に出て働こう、いや、働くべきだ！という強気のウーマン・リブや「女性の権利」を主張する気は私にはありません。仕事＝権利ではありませんし、「働きたい」という人に性別だけで機会が与えられないのは不当だと思いますが、人には向き不向きもあって、誰もが働いたからといって幸せになるわけでもなく、男女が同じラインに立たされても（私としては）困るばかりだからです。

世の中では「男女同権・平等」といいますけれど、「同じ権利を持っている」とことと「同じ事をする」ことは違います。これは私の意見ですけれども、女性には男性と同じようになろうとするのではなく（男性と同じになろうと考える時点で、下位にあることを認めているようなものですし）、女性にしかできないこと、女性のほうがうまくやれることを通して、社会の一端を担えれば（または影で動かせれば！？）いいなあと思います。

話はちょっとそれたかもしれませんが、『エリン・プロコビッチ』はとにかく女性から元気をもらえる、女性にウレシイ映画なのでした。

『エリン・プロコビッチ』 2000年 アメリカ 132分

監督：スティーヴン・ソダーバーグ

出演：ジュリア・ロバーツ（エリン）／アルバート・フィニー（エド）／アaron・エッカート（ジョージ）





母は、彼女自身の世界において、祝福された聖なる存在である。

カーバは、宇宙の全ての真実の精髓、意義、本質、そして地図帳である。マッカは、全てと同様であり、また体全体における心である。

同様に、母は、社会の最も小さな社会、すなわち家族のための精髓、意義、本質、地図帳である。母は、基盤であり、柱であり、本質であり創造の力の最も重要な素材でもある。家庭において、すべては彼女を中心とし、彼女を包み、彼女に集中する。母として、彼女は常に彼女自身の軸を中心に回る。北極星のように。そして、天空に広がる軌道をたどる。

母は、この世において、来世に面しているような存在である。母たちが、その役割と働きから得る報酬、彼らが経験する痛みや困難とのアンバランスさ、そしてそれに対してどれだけ応えられているかということなどが、この事実の明白な証拠である。このことへの理解に、複雑な研究は必要ない。彼女の生涯を通して何を植えつけ、何を収穫するか、何を経験して、その見返りに何を見出すか、一瞥してみるだけで十分である。

彼女たちの顔は、天国の女性たち（フーリ）とおなじように、来世的である。彼女たちの眼差しは天使のそれのように深い。彼女たちの思いは霊的な存在のそれのように純粹である。祝福された土地の薔薇のように、彼女たちのための水や土や空気は、それを超越した領域からもたらされてくる。羨望され、愛らしく、魅力的である。もしあなたが注意深く見るならば、そこには魔法が存在すると言う結論に達するだろう。彼女たちは自らの物質的なあり方を凌ぎ、この世界を凌ぐ。そして彼女たち自身をも凌いでいる、この世界が含むものを凌ぐのだ。

繊細で思慮深い精神をよく観察すれば、人は、母という世界の中で、天来の思いによって与えられたこの上なくすてきな夢の反射を見出すだろう。その世界はいつでも繊細で、思いやりに満ち、愛情に溢れている。そして、人の創造を超える喜びのメロディーに到達するだろう。それがもたらす空気の中で、私たちはほとんどいつでも、静かに漂う微風を感じていることができる。それは夜になると異なり、昼になるとまた異なる。私たちは天国の慈悲、愛情、旋律が心に押し寄せてくるのを感じることができる。そして私たちは、あたかも、私たちの周囲が完全に天使や霊的な存在に囲まれているように感じる。私たちは何度、真夜中に、彼女たちの輝く、魅力的な顔に映し出された、創造の本質を形成する精神と意義を見出したことだろう。それはこの世に下され、全ての時間と空間を超越し、私たちは無限というものに根ざしている大きな慈悲を感じることができる。これは、彼女たちの微笑み、彼女たちの悲しみをとおし、煌く。私たちは彼女の腕に飛び込むことを切に願う。そこには若干の不安があり、曖昧さがあり、しかしそれでも魅力的な動機付けがある。私たちが悲嘆に暮れ、失望し、悲しみ、孤独を感じていた時、私たちは

何度、彼女たちの魔法のような胸に抱かれたことか。それは私たちに希望を吹き込み、安心感を抱かせる。そこは暖かく、力強く、心地よい場所である。私たちは手足を伸ばし、彼女の不思議に満ちた囁きで暖められる。

彼女たちが私たちが胸に抱きしめるたびに、彼女たちは何の見返りも期待しない真の英雄になる。彼女たちはほとんど奇跡といってよい状態にある。私たちは安心と信頼のうちに自らを見出し、自分が何でも克服できるという感覚を正すことができる。彼女にしっかり掴まっていれば、まるで自分が誰にでも挑んでいけるようにすら感じることもある。

母は空と同じように深い。彼女は一つの謎に満ちた感情の世界である。空の星の数ほどの思いや感情がそこにある。そして、溶岩流のように、あるいは地下泉のように流れ、あふれる。彼女は自分の運命に従い、喜びにおいても悲しみにおいても穏やかさのうちにあり、何の見返りも求めることない。彼女は幼子に対し憤慨することもない。彼女は愛情と信頼の結晶であり、彼女が経験する困難さも、彼女の魂を覆ってしまう不実な子供たち、最もつらい別離の悲しみを与える子どもたちも、彼女を服従させ、諦めさせることはない。

母に関する一つの物語がある。血に飢えた息子が、母親を何度も刺した。その際、ナイフが彼自身の指をも切りつけ、彼は思わず「お母さん！」と叫ぶ。母親は彼の腕をとり、「大丈夫、わが子よ」と呼びかけるのだ。

子供の頃以来、この話を思い出すごとに、私は震えが押えられなくなる。私はこの小さな傘をとおり、母の愛情の偉大さを感じようとしてきた。彼女たちの物理的、物質的側面に加え、永遠と来世を信じる母は、霊的、あの世的な側面を有する。物質的および精神的な領域に確立された世界において、肉体と精神の世界において、彼女たちの心は理解できないほど強く、彼らの子どもたちと結びついている。世俗的な人々によって、強く根源的な関係と見なされているような結びつきは、この結びつきに比べるなら薄暗い影のようなものでしかない。しかしこれを、真の信頼も、信頼のうちに永遠の喜びを見出したこともない人々に説明するのは、容易ではない。

そう、こういったことを説明するのは、実際、非常に困難である。彼女たちの誠意がどれほど深いものか、その献身がいかに、休みなく続けられるものであるか、彼女たちの心がいかに愛で沸き立っているか、彼女たちの眼差しがいかに私たちにとって有望な手当てであり、信頼を与えるか、そして、もし、死すべき運命とはかなさの中にあつたとしても、彼女たちがいかに、永遠の、来世的な思いで満たされているかを。

考えてみてほしい。彼女たちは私たちの為になんと長い準備のプロセスを経験することだろう。彼女たちはどれほどの試練と戦うことだろう。どれほどの夢と疲労のうちに生きるだろう。想像と夢に彼女たちの心は満たされ、絶望と苦しみで空にされる。どれほどの困難さと負担に耐え、どれほどの試練を

受けることだろう。どれほど苦しみ、どれほど嘆くだろう。どれほど多く、彼女たちは泣くだろう。そしてどれほど、私たちが泣いた時慰めになってくれるだろう。どれほど多く、彼女たちは愛情で溢れ、またどれほど多く、彼女たちは愛情を必要としているだろう。要するに、どれほど貴重な価値あるものを、彼女たちは私たちの為に費やしてきたことか。何も見返りを期待せず、どれほど努力してきたことか。

もし、私たちが抱きしめ、キスして、優しく撫で、私たちの感情から悲しみと落胆を取り除き、私たちの心配を共有し、私たちが彼女の代わりに食べることを望み、彼女の代わりにいい服を着ていることを望み、私たちが空腹か満腹かによって自分も空腹か満腹かを感じる人がいるなら。私たちの幸せの為に超人的な努力をし、想像もつかない困難に耐え、私たちに体を成長させ、意志を強くし、知性を鋭く明敏にし、私たちの地平線を来世に向かうものとする方法を示す人がいるなら。目に見える形であれ、見えない形であれ、一切の見返りを求めずこれらを行なう人がいるなら、その人は私たちの母以外にありえない。

私たちは、生涯の重要な部分を彼女たちに抱かれて、彼女たちのもたらす空気に包まれて過ごす。その場所は孔雀の羽より美しく、不思議に満ちた花の世界よりも魅力的で、蜂の巣よりも暖かく、活発である。そして巣の中で最高のものよりもなお、保護され、安全である。私たちは世話をされる喜び、保護されている喜びを知り、学ぶ。私たちはその実行と責任、そのシステムと方法を学ぶ。私たちのニーズと弱さが私たちに圧迫する時、私たちの弱点、欠点、その他人生でうまくいかない物事があった時、私たちは常に母に逃避し、彼女の助けでそれを乗り越えようとする。私たちが彼女に逃避した時、彼女は私たちに胸に抱きしめ、私たちの心に安心と信頼を吹き込む。このような時には、おそらく私たち皆が、彼女たちの眼差しから、微笑から、しぐさから流れてくる静かな詩、思いが溢れる音、そして愛情の微風を感じたことがあるのでは、と私は思う。

私たちが彼女たちと過ごしたこういった情緒豊かな、夢見るような夜と昼には、私たちはほとんど絶え間なく続く至福の夢の中にいる。明るい昼間には、私たちは彼女の胸から聞こえる、人生で最も甘美なメロディー聴いている。それはナイティンゲールの歌のようで、私たちの理解できる限りでは、それは「これが真の幸福なのです」と言っている。

母は、創造の過程において最も重要な要素である。人間の世界で最も豊かな柱である。彼女たちは私たちの目の光である。私たちは皆、彼女に対し、体を半分に折るように身をかがめ、耐えられないほどの恩の重さを感じる。最も重い責任を感じる。私たちは体を二つに折り曲げ、丸めた背中を誇りに思う。

天使が白鳩のように飛び回る天国の泉は、母の強い鋼を鍛造する水を提供する。そうでなければ、彼女の魂の光がこれほどに私たちの目を圧倒してきたであろうか。彼女の光だけでなく、彼女の影すらも、それが引き寄せた蛾を燃やしてしまう。私自身の世界において、私はまだ、その崇高な特質の影響を受けた、深い心のショックから、立ち直ることができずにいる。そして彼女の光—私は以前よりもよりそれを感じるのだが—は、不思議に満ちた光の源であり、暗闇で私たちを照らす。

母は、愛の英雄である。彼女はその魂に、愛情や優美さと共に、繊細さと勇気を併せ持つ。母は羽のように柔らかく、繊細で、絹のように滑らかである。同時に母は、自分の子どもたちを保護し、守るためには、雌ライオンのようにタフで、激しい。

どのようなものが私たちの頭上に、天空にあったとしても、母の手はそれより上にある。天国への道は母の足元を通る。神はそのような崇高さと特権を彼女に与えられたのだ。この世界の王国は、それに比べると地位を伴わない単なる冠以外の何物でもない。さらに、これまで母の足元に見出されていなかった王冠は、頭に載っていても、長続きする価値をもたない。

崇高な、尊い存在、靈的存在と同じくらい繊細で、天使と同じくらいけがれなく、空と同じくらい深い存在よ。この世の向こうの領域があなたの価値の上にさらなる価値を与える。あなたの名声のメロディーが、天使のとどまっているところから聞こえてくる。あなたの命の歌が天空で響き渡っている。あなたはあなたの心臓を通して突き刺される感情の刃にいつも耐えた。そしてネックレスのように、教えの宝石を首にかけた。私たちは皆、あなたのしもべであり、あなたは愛情、信頼、誠実さの網で私たちを捕らえる、無冠の王である。この世界に存在する全ての生命に独自の精神、本質があるのならば、あなたが私たちの生命の本質に違いない。

神が、その御光であなたに復活の朝を教えてくださいますように。あなたの未来が、天国の聖なる金曜日のように喜びに満ちたものでありますように。そしてあなたの再会が、祝福されたものでありますように。





一人のムスリムとして、「クルアーンで名前が記されている唯一の女性 マルヤム様」という名の詩と、インフォ誌に掲載された「私たち皆のマルヤム」という論説によって、私はこれまでも、マルヤム様に関する考えを述べてきました。

ここでは、別の観点からこのテーマについて取り上げてみたいと想います。

クルアーンは、マルヤム様を、純潔を守る点で最良の女性、模範として、特に優れた高潔さと潔白さの持ち主である女性と説いています。私たちはマルヤムという名前を、愛する者たちに与えます。トルコでは人々は彼女を「母マルヤム」と呼びます。エフェスにある家を訪問し、墓もまたそこにあるものとして喜びます。

偉大なクルアーン解釈者であるファフルッディン・ラージは、自身の解釈で次のように記しています。「アッラーは、アードムを、その時点の被造物よりもなお優れた特性と共に創造された。そしてアッラーは、魂の強さの成熟と、完全さへの到達を、彼の一族のうち一部に与えられた。彼らはその数を増した。後にヌーフへと、さらにはイブラーヒームへと続きました。そしてイブラーヒームからイスマーイールとイスハックに流れが分かれました。イスマーイールは、ムハンマド預言者の聖なる魂が現れ、選ばれることの始まりとなった。イスハックも、子孫から子孫へ、はるかアリ・イムラーンにいたるまで、ヤアコーブの血統の預言者たちの出現、そしてイーシャの血統によって財産の始まりとなった。そしてこの状態がムハンマド預言者にいたるまで続く。全ての預言者は、その当時において最上の選ばれた人たちであった。最後にムハンマド預言者が現れたことにより、預言者性という光、富という榮譽が、預言者に受け継がれたのである。」

マルヤム様の父は、メタンの子イムラーンです。彼も、イーシャの子ダーウッド、その子預言者スレイマーンの血筋です。この血統もまた、ヤアコーブの子ヤフダの血筋です。そもそも、ムーサー預言者（モーゼ）とハールーン預言者（アロン）のそれぞれの父の名も、イムラーンです。ムーサーとハールーンという二人の預言者のそれぞれの姉の名も、マルヤムです。この二人のイムラーンの間には、1800年という歳月が流れているもといわれています。

そう、マルヤム様は、このような一族に生まれた人なのです。

これらから到達できる点が、イブラーヒーム預言者（アブラハム）です。そこからまた、私たちの第二の父ヌーフ預言者（ノア）、そこから、第一の父アードム預言者（アダム）です。私たちは皆、同じ祖を持つのです。

ベディウヅマン・サイド・ヌルシは以下のように語ります。「そう、あなたは否定できない。あな

たが一人の人と同じ大隊にいることによって、彼に対し親友としての結びつきを感じる。そして一人の司令官の命令にともに従うことによって、友としてのつながりを感じる。そして同郷であることによって、兄弟のような愛情を感じる。信仰の与える光と意識によってあなたに示されている、伝えられている神の御名の数だけ、同一であることによる結びつき、一致によるつながり、兄弟としての愛情が存在するのだ。例えば、私たち皆の創造主は同一、私たちの主は同一、崇拝の対象も同一、私たちに糧を与えられる存在も同一、人間に顕示される神の美名の数ほどに、私たちは結びつきを持つ。」(22番目の書簡)

慈しみ深く、潔白というマルヤム様のイメージが人々の理性に存在し、また純潔と高潔さのシンボルとしての母マルヤムも、私たちアナトリアの人々の心に存在しています。この愛情があるからこそ、エフェスに彼女の家があると認めているように、墓もそこにあることを私たちは想像し、これが絶対的な事実であることを強く望みます。彼女の名前を、私たちは自分の娘たちに与えます。そして「私たちの母」として、彼女を「母マルヤム」と呼ぶのです。女性のイスラーム教徒の中には、彼女を夢で見て、全ての偉大なる人たちの魂に開端章、ヤーシーン章を読み、捧げようとするのと同様に、マルヤム様の魂の為にそれを捧げる人々もいます。彼女の存在は、イスラーム教徒とキリスト教徒をお互いに接近させる、私たちの共通項の一つなのです。

マルヤム様については、直接的、間接的をあわせ、クルアーンの13の章で35回、言及がなされています。

マルヤム様の母は、妊娠した時、おなかの中の子がアッラーのために礼拝場で奉仕することを望み、願をかけました。しかし出産にいたり、母は驚きうろたえました。なぜなら生まれてきたのは女の子だったのです。礼拝場で導師になることはできそうにありませんでした。彼女は娘の名をマルヤムとし、アッラーに委ねました。アッラーは彼女のドゥアーをよりよい形で聞き入れられました。男の子が授けられることはありませんでした。しかし、最後の審判の日まで、名誉あるその名が思い起こされ続ける、そして何十億という人々が従う偉大な預言者の母となるマルヤムが、授けられたのです。アッラーは彼女を美しい植物のように育てられました。なぜなら母も、父イムラーンも亡くし、彼女は孤児となったのです。この栄誉ある家に遺された子を誰が世話するかということでくじが引かれ、結果マルヤム様はおぼの夫である預言者ザカーリヤの庇護のもとに入りました。

世の女性たちの中で、選ばれた存在であり、清らかさを持っていたマルヤム様のもとには、彼女がまだ子どもである時から、天使がおとずれ、褒め称え、感謝と共にイバードをするべきであることを教えました。彼女の母のドゥアーが認められ、マルヤム様は礼拝所の適した場所でイバードを行いました。天使たちの訪問は続き、マルヤム様に吉報をもたらしたのです。「あなたには、マスィーフ・イーサーという、現世でも来世でも名誉と尊さの持ち主となるであろう息子が生まれるでしょう。彼は、アッラーに近い者たちの一人となり、また、まだゆりかごにいる時に話すでしょう。」と。この驚くべき知らせに、マルヤム様は、「私に誰も指を触れることすらなしに、どうやって私の子どもが生まれましようか。」と応じました。そして「アッラーは、お望みになられたものを創造される。それが何であれ、「あれ」と仰せられることによってそれを実現させられる。」という返事が与えられたのです。

彼女のもとを訪れたのは天使のみではありませんでした。天国の果実もまた、もたらされました。マルヤム様が魂の世界へ上昇するごとに、その世界の益が彼女へもたらされるのでした。この状況はザカリーヤ預言者の注意を引き、彼は「これらはどこから来たのか？」とたずね、彼女も、この奇跡のゾーンからくる恵みについて、「アッラーの御許から与えられました。」と答えました。

私たちのモスクのミフラブのところには、この脅威の出来事を語るクルアーンの章句が、きれいに飾られ、礼拝場の頭に載せられた冠のようにかけられているのは、なんと美しい習慣でしょうか。

一時、マルヤム様は人々から離れ、東の地に引き籠り、また身をさえぎる幕を垂れました。この時のことについてアッラーはクルアーンで次のように仰せられておられます。「かの女はかれらから（身をさえぎる）幕を垂れた。その時われはわが精霊（ジブリール）を遣わした。かれは立派な1人の人間の姿でかの女の前に現れた。」

現れた精霊は、以前天使たちが伝えた吉報と同じ知らせをもたらし、純潔を守っていたマルヤム様が驚き畏れるのを見て、アッラーのお力は全てに対し十分であり、この出来事が一つの奇跡として現実に起こるであろう、ということを書きました。

運命があらかじめ定めた形で、マルヤム様は妊娠しました・・・。

この奇跡が創造されたことについて、ペディウツザマンの教え子であった故メフメット・フェイジ・パムクチュは、次のように分析をしています。「アッラーは、ビザンチン章で、人々の言語や肌の色が様々であることを述べられ、多様な形で創造される力をお持ちであることを示される。アダム預言者を母も父も持たない存在として創造され、それに続く人々を一人の母と一人の父から創造された。イーサー預言者（イエス）も父を持たない存在として創造され、環を完成させられたのだ。」

ヤーシーン章においてアッラーは、全ての被造物をご存知であることを明らかにされておられます。そもそも、全ての天使たちやアダム預言者のように、生命を持つもののそれぞれの祖も、母と父を持たない存在として創造されました。

蜜蜂は、女王蜂がオスから取った精子を一つの袋に集めています。精子がかけられた場合はメスの幼虫となり、かけられなかった場合はオスの幼虫になります。つまりオスの蜂には父親がいないのです。このように、アッラーの創造には、まさに驚くべき、奇跡的な芸術性が存在するのです。アッラーのなされたあらゆる事象において、英知と神秘が存在するのです。私たちがなすべきことは、この創造のハーモニーから教訓を得て、アッラーの荘厳さ、偉大さに対し、一人のしもべとしてなすべきことを果たすことなのです。

マルヤム様は、陣痛が始まった時、遠方に引き籠もりました。肉体的な痛みと共に、栄進的な痛みと不安がありました。この出産を、人々にどう説明すべきでしょうか。死んで、忘れ去られることを願っていたのでした。しかし神意はそうではありませんでした。マルヤム様がある丘で、ナツメヤシの幹につかまり、痛みを苦しんでいる時、彼女を慰め、悲しみを癒し、冬を春へと替える、霊的な呼びかけがあり

ました。「悲しんではならない。主はあなたの足もとに小川を創られた。またナツメヤシの幹を、あなたの方に揺り動かせ。新鮮な熟したナツメヤシの実が落ちてこよう。食べ且つ飲んで、あなたの目を冷やさない。」

クルアーンの章句が伝えるこのシーンの装飾として用いられる新鮮なナツメヤシと水は、今日、理想的な出産施設のしるしを示しています。新鮮なナツメヤシも、水も、さらには水の音も、出産を容易にし、妊婦にとって安らげて楽な環境を作り出すものなのです。新鮮なナツメヤシは母乳の出をよくするという特質によっても知られています。

また、神聖な示唆として、マルヤム様には、人という時に「言葉断ち」をし、誰とも話さないことが教えられました。人々が彼女のところに来ていろいろと話し始めたので、マルヤム様は布にくるまれた聖イーサーを指さしました。そしてイーサー預言者も、次のように話したのです。「わたしは、本当にアッラーのしもべです。かれは啓典をわたしに与え、またわたしを預言者になさいました。またかれは、わたしが何処にいようと祝福を与えます。また生命のある限り礼拝を捧げ、喜捨をするよう、わたしに御命じになりました。またわたしの母に孝養を尽くさせ、高慢な恵まれぬ者になされませんでした。またわたしの出生の日、死去の日、復活の日に、わたしの上に平安がありますように。」揺りかごで話したこともまた、一つの奇跡でした。

イーサー預言者はそもそも、アッラーの一つの言葉でした。言葉は、赤ん坊の時すでに話したのでした。

アッラーが預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）に、クルアーンで、独立した一つの章（マルヤム章）において、かつ、その他の章においてマルヤム様について語られていることにもまた、当然多くの英知と神秘が秘められています。

特に、ムハンマド預言者（彼の上に平安あれ）が、偶像を崇拝し、イスラームを否定する人たちによって受けられた苦痛に対する慰めという観点で、マルヤム様の身におきた出来事が説かれていることは、非常に重要なのです。





今月は、去年11月、喉の手術のため入院した時の思い出から、「入院記」をおおくりします。人生、いろいろなことがあります、いつでも自分の心の中にサラームがある、自分の内側からの平安に守られている、ムスリムでいて本当に良かったと思えた体験です。

*手術や入院中の経過に関しては、相当な個人差があることを最初に述べておきます。

11月24日今晚眠れるのかな

朝から全く落ち着かなかった。前々日に10時に入院だと知らせてもらってから、何とか保っていた自分のリズムが狂ってしまっていた。なんだって10時なんだ？手術は翌日なのに。

出発は9時で十分だった。8時くらいからそわそわしていた。人生で2度目の入院。「入院ノート」を見ながら、持ち物の最終チェックをした。スヌーピーが青い星空を見上げているデザインだ。前の入院の時、真夜中に天井を見上げた思い出と重なった。このノートは、12月からはじまる「ほぼ日手帳」への橋渡しでもあり、薬アレルギー対策の重要な記録ツールの意味もあった。

10時5分前に到着した。書類を出して、少ししたら病棟に案内してもらった。

最上階の、緑の色調で統一された病棟だった。体調は確かに悪いけれど、まだ手術をしていないのに病室に入るのは変な気分がした。しかしとにかく荷物を運びこみ、すぐに片付けてしまった。

病室はとても機能的だった。ロッカーは大容量だし、ベッドの横にはウォールポケットがあ

り、薬が分類できるし、一人に一つ体温計が備え付けてある。

「とりあえず荷物片付ける。ヒマなので、体温測る。我ながらアホ」とノートに書いた。

その後看護師さんと面談があった。病棟や今後のスケジュールの説明などだ。こちらからも質問した。薬のアレルギーは当然のことだが、ムスリムであることも話した。入院中の食事のハラルの問題に対応してもらえることになり、ほっと一安心した。

案外、面談に時間がかかり、すぐにお昼の時間になった。デイルームで食べることになっていて、最初はうろうろしたが、私の場合手術後は病室で食べることになっていたの、このときも病室に運ばれてきた。

昼食後、ベッドの上でだが、仕切りカーテンもあり、きちんとサラートができた。アラビア語も目だけで練習していると、血圧と脈拍、体温を測る時間だった。そうこうしていると、主治医さんとの面談があった。外来で診断した医師と違う場合があると言われていたが、手術前の検査時の、女性の先生でほっとした。約1時間後に麻酔医との面談があった。もちろん、ノートにメモしながらだ。二つの面談を終え、「世の中はリスクでいっぱいだー！！」とノートに書いた。

面談が終わると夕食だった。夕食中、もう一人の麻酔医さんとの面談があった。夫のしょっちさんも来てくれた。お風呂（手術前は浴槽つきか、シャワーの好きな方を選べるが、私はシャワーにした。）に入って、少しテレビを見たらもう寝る時間だった。

総合的に考えると、前日入院、10時入院
でよかったと思えた。

11月25日 今日是一日、絶食だあ～

入院二日目。今日は手術の日。6時ぐら
いに目が覚めて、と思ったら看護師さんが来て、
朝一番の検温。その後、朝日を見る。

「あらかじめ唇に軟膏塗ったった～。朝日
がポコッてしててかわいかった」

とノートに書く。昨夜塗ったのは、手術後
の口内炎、口角炎発生時のため予め渡されていた
軟膏。ちょうど唇が荒れていたし、手術で口角が
切れたりすると聞き、「そんなんいやあ」と思っ
たので先に塗ったのだ。

朝食から絶食。手術は13時からというこ
とで、10時までは飲水OKだった。翌日の朝ま
で食べられないので、食事関係の荷物を整理し、
ベッド周りをすっきりさせる。洗濯も決行。病棟
内にランドリースペースがあって便利。洗濯の最
中に朝一番の診察。手術は予定通り。診察（病棟
内の一室である）から帰ると、洗濯の続きで乾燥
も終わらせる。

10時になり、やることもなくなり、朝か
ら動きまくった反動で眠たくなってちょっと寝る。
その後、ズフルを済ませ、ズィクル、ドゥアー、
アラビア語の練習とひととおり済ませると、万
一の時のためのドゥアーをする。それももうやり切
った感を得たくらいで、術衣に着替える時間にな
った。

13時になっても、呼び出しは掛からない。
最新式のこの病棟、ナースコールだけでなく、逆
に各ベッドに呼び出しもかかるようになっている。
患者は、ベッドからかなり離れていても、小さな
声でも応答できる。途中で、病室に新たな患者さん
が入ってくる。術衣を着たままあいさつ。第一
印象悪かったな～と心の中で苦笑した。

「2:15 歩いて手術室入り。だだっ広
すぎるフロアに多数のスタッフの方々。自分で
ベッドに寝る。」入院ノートには、こう冷静に記述
されているが、実際は、内心は、冷静どころでは
なかった。

病棟から専用エレベーターで手術室のある
階に下りた。フロアの半分がほぼ手術室と言える
くらい広かった。手前の「待ちスペース」のよう
なところで待っていると、看護師さんの申し送り
の音が聞こえてきた。

しばらくすると話し声もやみ、今まで話を
きいていた方の看護師さんに、肩に腕をまわされ、
「さあ行きましょう。」ととびきり優しく言われた
あと、いっしょに歩き始めた。

自動ドアを抜けるとすぐ手術室だった。前
に手術したところに比べ、めちゃくちゃ広く感じ
た。大勢のスタッフの方が手術台を囲み、入っ
てきた私の方をみて「あやあ」みたいな感じにな
った。

回れ右して走り出したいとほんの一瞬思っ
た。歩く足が重く感じた。そして、自分でベッド
に乗った。複雑な心境だった。

いろいろセッティングが終わり、「点滴一
本だけ、ちょっとチクツとしますけど、すみませ
んねー。」と麻酔科医さん。そして、「はい、マス
クつけま～す、ちょっと窮屈になりますけど、最
初は酸素で～す。」とカポッとマスク装着。

「では麻酔、入りま～す。」

来たっ！麻酔！ひえ～っ！今まで透明だっ
た酸素マスクの中に、煙のように乳白色の気体が入
ってくるのが見える。と同時に、頭の中にもモ
ヤがかかるようだった。緊張は最高潮に達し、万
一の時のドゥアーもすっかり飛んでしまい、シャハ
ーダの言葉を大慌てで2回念じた。しかし、この
まま寝ないのもこわいので、2回深呼吸した。「も

うこれでいくな～」と思った。

「夢を見ていたら、すごい呼びかけられたのと自分の咳き込む音で目覚める。しばらく血痰でる。」

麻酔中は脳も眠るときいていたので、夢を見ていたのがびっくりした。さらに、麻酔から「醒めてもそんなにすぐにはシャキッと目覚めません、薄目があく程度です」と言われていたが、咳のせいかバチッと目が開いた。そしてすぐ、「この咳は手術のせいですか？」ときいた。

角度のせいか、周りの人の顔は見分けられなかったが、上の方から、「樋口さ～ん、手術はうまくいきましたよ。」と主治医の先生の声がした。いろいろな人がいろいろ声をかけてくるので、まだパニック状態だったが、とりあえず上の方に向けて笑い顔を作ってお礼に代えた。挿管の時も何もトラブルがなかったとのことだったし、歯も折れていないし、口角も切れていなかった。弱々しい声だが、「アルハムドゥリッラー」と言って感謝した。

それから、次の日の朝まではつらかった。

「だんだん痛みが出てくる。神経がつながっているのか、顎が痛い気がしたり、舌が痛い気がしたりするが、結局手術した所の問題。微熱と、喉の渴きでつらいが、何とか痛み止め無しで乗り切る。無意識にゴクリと喉を動かしてしまう度、痛みにびっくりする。」

夜も、「ゴクリ」となる度「ぎゃおーす！」と叫びたくなるくらいの激痛に驚いて、うつらうつらしていても20秒置きに目覚める、といった感じだった。しかし、ひたすら、次の日の朝食のことだけを考えて我慢した。私は基本的にハングリーな人間だ。よく、「ハングリー精神」とか言うが、文字通りそうだった。痛いことよりも、「お腹空いた～」という感覚が大きくて、それ以外はかすんでしまうのだ。今これだけ痛ければ、明日の朝食だっておだやかではないだろう、とか、そんな予測はしなかった。

あまりにも眠れないので、ヤー シャーフィーと500回ほど（数えたので本当です）念じたら何とか眠れた。

・・・もしかしたら続きます・・・

購読価格（郵送料込み）バックナンバーは、1部200円（日本以外は1部250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号： 00140-4-574489 口座名義： Yasuragi

三井住友銀行 店番号：005（春日部） 口座番号：7315959 口座名義：Yasuragi
皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> info@yasuragiweb.com yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部